

## 平成 27 年度 社会教育施設における E S D 普及促進業務 成果報告書

### 【業務の目的】

本事業では、地域住民等が地域の魅力ある社会教育施設で E S D の推進が図られるよう、地域の環境教育の先導的な拠点となる場（社会教育施設等）として動物園と美術館を選定し、当該施設の特色を活かした E S D プログラムを作成・実践した。同時に、社会教育施設における E S D の推進の意義や一般参加者の声を、放送メディアを通じて発信し、広く共有することを目的とした。

### 【業務内容】

美術館と動物園をフィールドとした E S D プログラムを企画し、広報宣伝、当日の運営を実施した。その様子を FM おかやまで放送し、情報発信を行った。参加者へのアンケートや当日の参加者の様子からの効果についての評価をし、選定した E S D 専門家が考察した。

#### (1) 池田動物園における E S D プログラムの作成・実証

E S D 専門家として、岡山ユネスコ協会副会長 池田満之氏を選定した。プログラムの作成、池田動物園との調整、当日の進行を依頼した。当日進行に当たっては、池田動物園の専門スタッフが解説を担当、岡山大学生がグループリーダーを務めた。広報はチラシを作成し募集に活用したほか、facebook 等の SNS を利用した。また、池田動物園が学区内にある伊島小学校 5 年生を焦点にあて、参加をよびかけた。

#### \*開催概要

- ・ テーマ：動物園で考えよう！～生きものが絶滅しない地球環境とは～
- ・ 日時：平成 28 年 2 月 6 日（土）13:00～16:30
- ・ 場所：(株)池田動物園（岡山県岡山市北区京山 2 丁目 5 番 1 号）
- ・ E S D 専門家・当日進行：池田満之氏（岡山ユネスコ協会副会長）
- ・ 参加者：33 名（子ども 21 名）

#### (2) 大原美術館における E S D プログラムの作成・実証

E S D 専門家として、岡山大学地域総合研究センター准教授前田芳男氏を選定した。プログラムの作成、大原美術館との調整、当日の進行を依頼した。当日進行に当たっては、大原美術館学芸員が絵画の解説を担当した。広報では、チラシを作成し募集に活用したほか、facebook 等の SNS を利用した。

#### \*開催概要

- ・ テーマ：「美術館で考えよう！～持続可能な環境とは～」
- ・ 日時：平成 28 年 2 月 13 日（土）16:30～19:00
- ・ 場所：(公財) 大原美術館（岡山県倉敷市中央 1-1-15）
- ・ E S D 専門家・当日進行：前田芳男氏（岡山大学地域総合研究センター 准教授）
- ・ 参加者：35 名

#### (3) 放送メディアを通じた成果の発信・共有

岡山県内を放送エリアとする、岡山エフエム放送株式会社（通称 FM おかやま）と協力して、E S D 普及促進に努めた。

- ・ 放送日：平成 28 年 3 月 5 日（土）11:30～11:55
- ・ 特別番組「FM おかやま E S D 研究室」で池田動物園プログラム（2/6）および大原美術館プログラム（2/13）の様子を放送した。

なお、池田動物園のプログラム実施日には、讀賣新聞の取材があり、大原美術館のプログラム実施日には、山陽新聞とエフエムくらしきの取材があり、後日記事掲載ならびに放送された。

#### (4) 運営事務局として開催に関する事務運営等

プログラム実施に当たって、E S D 専門家と社会教育施設担当者ならびに、中国四国地方環境事務所環境対策課担当官と連絡をとり、打ち合わせながら実施した。社会教育施設等への支払い、募集チラシ、当日資料等の作成事務を行った。

## 【考察】動物園を活用したE S Dの可能性

岡山ユネスコ協会 副会長 池田満之

岡山市の池田動物園において、当該施設の特色を活かしたE S D (Education for Sustainable Development) の推進が図られるように、モデル的なプログラムを作成し、実証した。以下、企画した者として、成果と課題を整理し、動物園でのE S Dの可能性について述べる。

### ●企画づくり（検討プロセス）

企画の策定にあたっては、E S Dコーディネーター（池田満之）のもとで、主催者（環境省）、施設運営者（池田動物園）、施設利用者（地域住民等）、教育関係者（伊島小学校長、京山公民館長、岡山大学名誉教授等）、外部協力者（大学生等）が協力して取り組んだ。

企画は、池田動物園が来園者（団体）に行ってきの施設ガイドプログラムと、私が池田動物園で行ってきた保育士養成課程における動物園実習プログラムをベースとしつつも、主要なステークホルダー（関係者）の自由な意見、提案を反映させて今回のプログラムを形成した。E S Dでは、この形成プロセスが重要であることから、主なプロセスを以下に明記しておく。

平成 27 年 11 月に、主催者（環境省）からの相談を受けて、私の方で池田動物園にも相談して初期検討を行い、12 月 1 日に、環境省、池田動物園、外部協力者（グリーンウッド自然体験教育センタースタッフ）と私との話し合いの場をもった。その話し合いと本件に向けた施設視察を踏まえて、企画づくりを進めた。12 月 10~11 日、他施設の視察とヒアリング調査を山口県宇部市のときわ動物園ならびに関連施設の体験学習館“モンスター”で行い、動物園でのプログラムづくりの参考情報を集めた。情報収集は、これ以外にも動物園プログラムに詳しい全国レベルの専門家等にも行った。これらをもとに企画イメージをふくらませて、平成 28 年 1 月 4 日に池田動物園で担当職員（赤迫部長）と具体的な検討を行った。そこで検討した企画イメージをもとに、1 月 5 日には環境省と施設利用者（地域住民、子どもの教育支援者、池田動物園センター等）と、1 月 6 日に伊島小学校で青山校長先生と、企画相談を行った。特に青山校長先生には、子どもの教育を専門としている現場の立場からと、実際に教育の場として池田動物園を利用している立場から多くの示唆をいただき、今回の企画のテーマ（キヤッチフレーズ）等もこの話し合いの中で具体化し、広報用のチラシづくりに反映させた。1 月 22 日には、環境省と専



門家・教育関係者（岡山大学の村松名誉教授）と京山公民館・伊島図書館にてさらに踏み込んだ検討を行うと共に、本番でのサブ会場となる岡山県生涯学習センターに環境省と出向き、会場の確認とそれに基づく検討を行った。こうした数々の事前検討を踏まえて、1 月 30 日の 18 時~20 時 30 分、環境省や池田動物園をはじめとする主要なステークホルダーが京山公民館に集まって、踏み込んだ検討を行った。今回の検討プロセスにおいてもっとも重要な話し合いの場となったが、この場で踏み込んだ話し合いができたのは、事前に前述のような数々の検討を積み重ねていった成果である。この踏み込んだ話し合いの中で、主催者の意図や立場による思いの違い等を確認、共有できたことは大きい。これにより、今回のプログラムにおいて何を重視すべきか、何は省くべきか、ゴールはどこにおくかといった重要な点を、主要なステークホルダーの話し合いの中で明確にすることができた。E S Dプログラムは、そのプログラムづくりにこうした主要なステークホルダーの参画による手間と時間をかけた形成プロセスを組み入れることが、特に重要であることを本件においても再認識できた。

### ●テーマ・構成・内容

テーマは、主に小学校 5 年生あたりに焦点を当てて、「動物園で考えよう！～生き物が絶滅しない地球環境とは～」とした。構成・内容は、全体を 3 部構成とし、第 1 部では岡山県生涯学習センターの大研修室を用いて、オリエンテーションを行い、開催趣旨の説明、本日のプログラム内容の説明、目的・目標・視点の明示、主催者・スタッフの紹介と役割の説明、グループ分け、グループごとのアイスブレーキングを兼ねた自己紹介タイム等を行った。第 2 部では、実際に池田動物園に移動し、はじめに池田動物園のシンボルであるゾウのメリーを背景に、全員で集合写真を撮ったあと、赤迫部長のガイドのもと、園内をまわった。主要な動物たちのところで、赤迫部長による説明を聞き、質問等もして、参加者同士で学び合った。全員でまわった後、短い時間ではあったが自由時間をとった。買い物をする人、もっと見たかった動物を見に行く人、参加者がそれぞれに関心の高いことに自由行動ができるようにした。その後、岡山県生涯学習センターの大研修室に戻り、ふりかえりシートをもとに、ワークショップ（グループワーク）と全体会、ふりかえりとまとめを行って解散した。



## ● 成果

事前に主要なステークホルダーの参画によって企画を組み立てたことから、その効果が随所に見られた。テーマを学校現場の先生の声を活かしたものにしたこと、地元の小学校に企画段階から参画してもらつたことで、特にこうした内容に関心の高い小学生達に参加してもらえ、ワークショップ等を内容の濃いものにできた。今回は、テーマに対して、何が大事なのかと、何をするかを具体的に話し合つて発表してもらつたが、特に小学生達の発言は、このテーマを単なる動物愛護や生態系保全という狭い視点で捉えるにとどまらず、身近な3R運動などにもつなげていつており、ESDが重視しているつながりの「見える化」と、グローバルな視点から身近な行動へつなげて実践していくという点がしっかりとできたことは大きな成果と言える。

また、本番でのグループリーダーを次世代の担い手である大学生達に任せられたのも、企画段階から大学生達に参画してもらっていた成果と言える。しかも、大学生達には事前に必要以上に情報を与えすぎないようにしたのと、グループリーダーを任せられる人材であるという見立てをもって、その人達に前もってグループリーダーをお願いすることを伝えないでいた。これは、E S Dプログラムへの経験が少ない大学生達の場合、頑張りすぎて教え込んでしまうリスクがあったので、参加者に対するファシリテートに重点をおいたグループリーダーとして活躍してもらえるようにするために、もちろん、その場合、話し合いの中で、専門的な情報等が必要になる場合も想定されたので、池田動物園の専門スタッフである赤迫部長や、岡山大学の村松名誉教授などにヘルプ要員として加わってもらうというサポート体制は整えておいた。実際、最後の全体会での話し合い等で赤迫部長等に専門的なアドバイスをいただいた内容は、参加者にとって大きな学びとなり、探究心を強めることにつながったことは、事後のアンケート（ふりかえりシート）を見てもよくわかる。

ESDにおいては、学習者の主体的な学びが重視される。大事なことは「体験」で終わることなく、「探究」へつながり、事業後も自ら主体的に学び行動していくようになってもらうことが望まれる。今回のプログラムは、その点を考えて、価値創造型の学びの場になるように、あえて参加者への配布物も考える視点・論点を明記したシート(ふりかえりシート)と動物園マップだけを配布するにとどめて、答えありきの学習プログラムにならないように配慮した。

最初に配ったふりかえりシートは、今日は何を意識して活動するのかを事前に認識してもらうための重要なシートであるが、あまり項目が多すぎると意識しきれないので注意がいる。今回は、①参加した感想、②生き物が絶滅しない地球環境にするためには何が大事か、③あなたは何をするか、④その他、気づいたこと、思ったこと、気になつたこと、の4項目に絞つた。

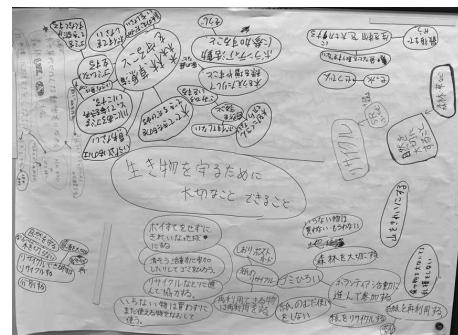
グループワークでは、はじめに動物園を見学して感じたこと、気づいたこと、知ったことなどを

出し合ってもらった。これは、意見を出しやすくして話し合いが進みやすくなるためと、同じ場所と一緒にまわり、同じ説明を聞いたにもかかわらず、そこから得たもの、心に残ったもの、関心をもつたものがいかに人によって違うか、あるいは同じかを認識してもらうためでもある。グループで話し合ったことを全体会で発表してもらったが、これもコミュニケーション力を高める学びとなっていた。続いて、主題についてのグループワーク（「生き物が絶滅しない地球環境にするためには何が大事か、あなたは何をするか」）を行ってもらい、それらについても全体会で発表してもらい、全員で共有した。発表してもらった内容は、知ることや意識をもつことの大切さ、自分事として捉えて行動すること、それを伝え、広げていくことの大切さを示唆しており、E SDが目指しているものと合致していて、今回の内容がE SDのプログラムとして有効であったことを示している。

### ●課題と今後の可能性

今回は、最終的には定員以上の参加者が集まつたが、動物園という集客力のある施設でも、E S Dというまだ一般の人には馴染みが薄いものだと、一般公募では集まりが悪かった。ただ、参加した人の感想、ふりかえりを見ると、多くの学びがあり、E S Dへの理解も深まり、意識と行動に良い変化を生み出していることから、動物園を活用したE S Dが有効であることは明確だと言える。今後は、E S Dという表記は入れるとしても、動物たちとのふれあいや親子での楽しい学びをメインに示した呼びかけから公募し、実際に参加してもらったことでE S Dの学びが成果を出せるようにする方が、より多くの人に参加してもらえるものと思われる。

また、今回は環境省のモデル事業だったので、動物園への入園料が無料であったが、通常は入園料がかかる。地元の小学校でも、この入園料がネックで、動物園を学びの場として活用しにくい現状がある。かといって民間の動物園では、入園料を下げるとは経営的に厳しい。となると、いかに現在の入園料でも来てもらえるより魅力的なプログラム、付加価値の高いプログラムを開発する必要がある。さらに、他の施設（生涯学習センターや公民館等）や教育委員会、市民団体、学校等に、教育・学習の場として年間を通して活用してもらえるように、学びのネットワーク化、パッケージ化等も進めていくことが望まれる。



## 【考察】美術館を活用したE S Dの可能性

岡山大学 地域総合研究センター 前田芳男

岡山県倉敷市にある大原美術館が提供するイブニングツアーを活用してE S D（Education for Sustainable Development）を試みた。名画を見ながら、その中に、持続可能な開発（Sustainable Development）の要素を見出そうとする実験的な取り組みである。以下、これを企画した者として、成果と課題を整理し、美術館でE S Dの可能性について述べる。

### ●企画の趣旨

美術館は、もともと教育の場としての機能を持っており、そこで何を学ぶのかは学習者に委ねられる。大原美術館に所蔵される作品は、19世紀後半から20世紀初頭に作成されたものが数多くあり、それらが生まれた時代、今に至る環境問題の萌芽があった。作品の中に、産業革命以後の工業化の進展、第一次世界大戦による都市の破壊といった時代背景が見え隠れするのである。また、その時代の人々の暮らしや価値観と言ったもの—穏やかな農村風景、水と緑、祈り、平和等—がメッセージとして込められている。ツアー参加者が、それらを感じとったならば、それがE S Dであろう。さらに、絵画を鑑賞しながらそこから刺激を受け、発想を飛躍させ、環境や私たち自身の暮らし方に关心が向くことも期待された。

### ●企画の意図

多くの人は、美術館は静かに絵画や彫刻を鑑賞する場であるという考え方を持っており、パンフレットを手に作品の解説を読み、個人個人で作品を味わうことになる。

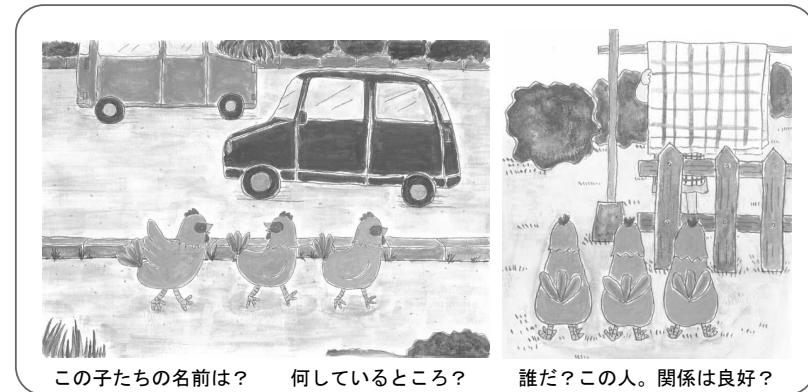
しかし、今回の企画では、作品を見ながら参加者同士が大いに対話することが求められた。美術館の学芸員にとっても、ある作品を取り上げ、そのE S D的解釈を解説しながらツアーすることは、経験のないことであった。そもそも宗教画に込められたメッセージの通説的な解説をするのと同じように、E S D的解釈を作品に与え、参加者がE S D的要素を作品の中に見出すように誘導することはとてもできそうになかった。また、そのような受動的な学びではなく、もっと自由に、個々人がその場で考え、感じたことについて声を出して会話することが真の学びになり、なによりも楽しい体験になるとえた。



対話の練習の様子



しかし、参加者は、大学生から70歳までと年齢層も幅広く、初対面の人同士であるから、遠慮して会話を弾まないことが心配された。そこで、ツアーを始める前に、参加者同士が絵を見て対話する練習をした。次図に示すように、絵本の一場面の絵のみを見ながら、自由に会話する練習をしてもらった。結果的に、これがよいアイスブレークになった。



この子たちの名前は？ 何しているところ？ 誰だ？この人。関係は良好？

### ●どのような会話がなされたか

ツアーにおいては、2、3人から数名の思い思いのグループで絵の前に立ち、感想を自由に述べ合った。その内容は、必ずしもE S D的なものだけではなく、「絵の中のこの人、いったい何を見ているのかしら」「何を話しているのかしら」「この農村風景はなつかしい」「この絵、何がいいのか分かりません」など様々であった。

E S D的な会話としては、例えば、印象派の画家による風景画を見て「風車のエコエネルギーと、運河に浮かぶ蒸気船が化石エネルギーを使いCO<sub>2</sub>を出している対比が面白い」「点描の明るい空気の表現は、実は産業革命できれいな空を失った当時の人々のあこがれではないか」と言った発話があった。また、「乾草小積みのある牧歌的風景の絵には、懐かしく、ほっとする」「フレデリックの大作は、人類の滅亡から復活へと続く流れで、3期に分けて制作されたが、今の時代は、人類の繁栄から滅亡へと逆の流れにあることに思いを致すべきだ」と言った感想もあった。

19世紀末から現代へと時代を画した展示室を順に巡りながら、100年前の絵画の中には人と自然、街との関りが描かれていたが、1960年代のアメリカのポップアートにはモノや情報、消費が描かれ、現在の作品には孤立した個人が描かれている、というように、美術館全体を通して感じるE S D的要素も見いだせた。

### ●課題と今後の可能性

絵画作品を見ながらE S D的要素を見出し、発想を膨らませる作業は、なかなか容易なことではなかった。オリエンテーションにおいて、漠然と「E S Dについて考えてほしい」としか説明しなかったことも、その一因である。もう少し具体的に、「絵の中に人と自然のつながりを見出してほしい」「破滅や破綻につながる教訓を見出してほしい」というように指示しておけば、より深みのある対話ができたかもしれない。1つの課題作品について、全員で意見交換するというやり方もあったかもしれない。これらは、今後の取り組みへのヒントである。

今後の美術館を活用したE S Dの可能性は、大いにあると考える。特に、ツアー形式で、同じ目的をもった小グループにより、自由に会話できる雰囲気の中で行われる学びのスタイルは、他の展示系の教育・文化施設においても援用可能であると考える。

## 【実証・評価とふりかえり】

今回、ESD専門家として企画・当日進行をになった池田満之氏、前田芳男氏お二人の考察には、企画趣旨と実施に当たるまでのプロセスが詳細に書かれており、社会文化施設におけるESDの普及促進を今後進めていく上で示唆が数多く示され、課題と可能性が整理された。

全体を通して、以下の3つの点について、ふりかえっておきたい。

### ①施設の職員の理解と協力が不可欠

大原美術館を舞台にしたESDプログラム実証では、学芸員等の美術館職員の方の理解と協力が不可欠であった。通常と違う切り口で「場を借りて」実施することに、理解と受容をいただくことが重要だった。打ち合わせの中で、学芸員の方が昨年、岡山市内で開かれていたESD世界会議の情報を知っていてどんなことをしているのだろうと興味を持っていたこと、ご自身の勤務する美術館でのESDの学びの可能性について、柔軟な発想と受容力があったことが、実施する上で大きな助けとなつた。「持続可能な取り組みに協力出来ればとも思います。」とのコメントをいただくことができた。今後、社会教育施設でESDを展開する上で、職員への丁寧な説明や学びの効果についての理解が得られるような働きかけが重要である。

### ②ステークホルダーの参画と連携が充実のカギ

池田動物園のプログラム実証では、施設職員だけでなく学区内の教育関係者や大学生と協力して企画段階から実施している点で、手間と時間をかけ、踏み込んだ話し合いをされていた。ESDは、この形成プロセスそのものが大事である点を、ESD専門家である池田氏が指摘している。

立場によって思いの違いがあることが分かり共有できたこと、結果として利用者側の視点が反映された内容となり、さらに、大学生がグループ進行役を務めたことで、彼ら自身が多く学びを得たことを考察されている。

このように、多様なステークホルダーの参画と連携があったことは大きな意義がある。社会教育施設が、新しくESDプログラム実施にチャレンジすることで、地域や利用者に開かれていることが周囲に理解され、それによってわが町の〇〇と愛着につながる等、関係性を生み出すことが期待できる。そのことは社会教育施設側のメリットにもつながるだろう。

### ③わかりやすさと興味を引く内容が求められる

池田動物園プログラムでは、ESDに関する知名度の低さから、もっとほかの興味を引くプログラムと絡めることでまずは参加をしてもらう工夫が必要であるということの指摘があった。また、大原美術館プログラムでは、ESDについて事前の説明がないと参加者の理解が得にくく、具体的なテーマ設定が必要との指摘があった。しかし、「静かに」が原則の美術館内で、感想を述べあう、対話を楽しむという非日常を参加者が体験し、意見や考えが違うことに対話で気づくなど、双方向の学びがあることは、ESDそのものの考え方とも通じる。参加者の終了後の振り返りやアンケートでは、喜びや学びが得られたことがわかり、社会教育施設におけるESD普及促進の取り組みは今後に期待できる。